博士学位論文審査要旨

２０１８年2月１３日

論 文 題 目： A Study of Refusal Expressions in Asian Languages: A Comparison of Occurrences in Semantic Formulas and Levels of Closeness
（アジア諸言語における断り表現の研究―意味公式の出現と親密度の比較―）

学位申請者 ： CANDY

審 査 委 員：
主　査：　文化情報学研究科　教授　山内　信幸
副　査：　文化情報学研究科　教授　川﨑　廣吉
副　査：　文化情報学研究科　教授　金　　明哲
副　査：　文化情報学研究科　教授　田口　哲也
副　査：　関西外国語大学大学院外国語学研究科　教授　益岡　隆志

要　　旨：

本研究は、6 つのアジア諸言語―日本語、インドネシア語、韓国語、ベトナム語、フィリピン語（タガログ語）、中国語―の断り表現を比較し、断り表現における意味公式の出現順序は、言語構造（主要部前置・後置）および親密度という機能的要因と関係があることを明らかにしたものである。

2014 年～2016 年の間に、6 つのアジア諸言語の母語話者を対象にした DCT（Discourse Completion Test・談話完成テスト）を実施し、データ収集を行った。DCT は、4 つの親密さの段階－見知らぬ人・知り合い・友達・親友－で設定され、自由記入と順序並びで形成されたものである。被験者は、チャリティーイベントのボランティアの依頼をどのように断るかを記入するように求められた。断り表現のデータは、意味公式（断りや謝罪のような発話行為を分析するための分析単位）の機能による分類で分析され、言語間の表現の比較・対照が可能となった。先行研究の蓄積としては、Whorf（1956）は、言語のカテゴリーは、人間の認識または行動になんらかの影響を及ぼすと指摘した。また、山梨（1986）は、発話の遂行的な側面の明確化には、特に、文法と語用論の接点が密接に関わっていると主張した。佐久間・加藤・町田（2004）は、まとまりのある内容を表している連なった文は、談話（discourse）と呼ばれ、一定の意味を表す文が構造を持っているのと同じように、談話にも構造があると主張した。以上のことから、言語の構造は発話行為・表現形式に密接な関係があることが導かれた。

6 つのアジア諸言語での断り表現のデータに対する統計分析を行い、主要部前置言語は、「断り」を他の意味公式より先に述べる傾向があり、一方、主要部後置言語は、他の意味公式を先に行ってから、「断り」を述べるという結果が得られた。また、親密度による統計分析の結果については、各言語の母語話者は、相手との親密さを考慮しながら、断り方を変えたりすることが判明した。6 つの言語データには、同様に、見知らぬ人に対して「断り」を他の意味公式より先に述べるパターンが使用されることも観察された。

以上の結果から、本研究では、断り方に影響する 2 つの要素―文法的な側面と機能的な側面―から成る断りパターンの要素モデルを提案した。第一義的には、断り表現における意味公式の出

現順序は、言語構造（主要部前置・後置）が決定要因となり、もしある言語に２つ以上の断りパターンが文法的に容認される場合には、その社会の価値観や文化に基づく親密度のような機能的な要素が第２の決定要因となると結論づけた。

本論文により、アジア諸言語を対象に、断り表現の意味公式の出現順序と言語構造および機能的要素との相関関係を明らかにし、断り表現の言語学的一般化に十分な貢献を果たした。

よって、本論文は、博士（文化情報学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

２０１８年2月１３日

論 文 題 目： A Study of Refusal Expressions in Asian Languages: A Comparison of Occurrences in Semantic Formulas and Levels of Closeness
（アジア諸言語における断り表現の研究―意味公式の出現と親密度の比較―）

学位申請者: CANDY

審 査 委 員：
主　査：　文化情報学研究科　教授　山内　信幸
副　査：　文化情報学研究科　教授　川﨑　廣吉
副　査：　文化情報学研究科　教授　金　　明哲
副　査：　文化情報学研究科　教授　田口　哲也
副　査：　関西外国語大学大学院外国語学研究科　教授　益岡　隆志

要　　旨：

学位申請者は、2015 年度 4 月より本学大学院文化情報学研究科博士課程後期課程に在学しており、国内会議および国際会議での研究発表を通じて、精力的な研究活動を行い、それらの研究成果を、国際学術雑誌に 2 本、関連学会論文誌に 1 本の論文として公刊している。また、英語の語学試験にも合格していることから、語学（英語）について十分な能力を有していると認定されている。

2018 年 1 月 31 日（水）15:30 から夢告館 312 号室にて、約 90 分の公聴会と 40 分の審査会ならびに 2018 年 2 月 13 日（火）に審査委員全員による評価の最終確認を行った。博士論文全般の内容と関連領域に関する質疑に対して、学位申請者は的確な応答を行い、当該分野ならびに関連領域における知識と理解を有していることを示した。従来の言語学的な分析にデータサイエンスの手法を導入したことは十分に評価できる一方で、データサイエンスに基づく分析手法の習熟にはさらなる研鑽が期待される。以上の点から、総合的な評価として、博士（文化情報学）（同志社大学）の学位を授与するに十分な学力を有することを確認した。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： A Study of Refusal Expressions in Asian Languages: A Comparison of Occurrences in Semantic Formulas and Levels of Closeness
（アジア諸言語における断り表現の研究—意味公式の出現と親密度の比較—）

氏　　名： CANDY

要　　旨：

This study investigated refusal expressions in six Asian languages—Japanese, Indonesian, Korean, Vietnamese, Filipino, and Chinese—as an expansion and development of the work by Candy (2015). The purpose of this study was to examine whether there is a relationship between language category (head-initial/final language) and the occurrence of semantic formula function groups (SFFGs) in refusal expressions. For this purpose, a survey called Discourse Completion Test (DCT) was conducted with native speakers of the six languages between 2014 and 2016. The test was set with four levels of closeness—stranger, acquaintance, friend, and best friend—and consisted of two sections—writing and ordering options. The respondents were asked to refuse a request of volunteer work for a charity event.

The refusal expressions were analyzed by their semantic formula. A semantic formula is an analyzing unit for speech acts, such as a refusal or apology, that allows us to compare these expressions among languages. In a previous study, Whorf (1956) stated that linguistic categories influence human thought and behavior. Yamanashi (1986) also mentioned that there is a close relationship between grammar and pragmatics in order to define a discourse accomplishment. Furthermore, Sakuma, Kato, and Machida (2004) confirmed that discourse has structure, similar to a sentence. Considering this, language structure is assumed to have a relationship with the construction of an expression or discourse.

The result of analysis on refusal expressions of the six languages showed that head-initial languages have a strong tendency to use "Refusal" before another semantic formula, and head-final languages have a tendency to use "Refusal" after other SFFGs. Meanwhile, results of the analysis of variance on the levels of closeness of each language showed that respondents change their ways of refusals depending on their closeness to the requester. Data on all the languages showed a tendency to use the refusal-first type toward strangers.

This study also proposed a factor-based model of refusal expression types that consists of two factors,

grammatical and functional, that affect one's way of refusing. If more than one refusal type exists, which is grammatically possible in a language, functional factors such as the levels of closeness determine which type is commonly used in a society based on their social values and cultural views.

In conclusion, this study clarifies the relationship between language category and the occurrence of SFFGs in refusal expressions. Further, the study examines the effect of levels of closeness on the refusal type in each language. The results might support the Whorf hypothesis, although this needs to be proved further, for example, in European languages and other settings such as an apology.